

絵師高田敬輔とその作品（その二）

——「選択集十六章之図」を中心として——

林 竹 人

〔抄 録〕

江州日野の絵師高田敬輔は、浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』に基づいて「選択集十六章之図」を描いた。そして、近世浄土宗典籍研究第一人者の義山から賞讃を得た。その掛幅状の「選択集十六章之図」（二点）、和字表現の選択集の挿絵（二点）、註釈書（三点）、計七点の資料を対照し、その特色を把握することにより、近世における法然浄土教の教義と絵画表現との関連性を把握する。

また、原典とする『選択本願念仏集』（義山校訂本）第一章の教相判釈の論理構成を通して、法然引用の龍樹、道綽、曇鸞、智顗、迦才の聖浄二門・難易二道論の引文の譬喩部分、また、それを説く法然、義山の論述に着目するとともに、絵画的に直接影響を及ぼしたと考えられる義山の『當麻曼陀羅述獎記』を通して、高田敬輔が何を拠り所として絵相を表現したか検証する。

キーワード 選択集十六章之図、高田敬輔、良照義山、難易二道論、水路の乗船

一、おしめし

江州日野郷の絵師法眼高田敬輔（延宝二年へ一六七四）〜宝暦五年へ一七五五）が近世浄土宗典籍研究第一人者の良照義山（正保四年へ一六七四）〜享保二年へ一七二七）の下に、浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』『無量寿経』に基づいて描いたのが、「選択集十六章之図」正徳三年（一七二三）と「無量寿経曼荼羅」正徳四年（一七二四）である。

高田敬輔の伝記と主な画業、両曼荼羅の全体構成、その制作の経緯や背景、さらに及ぼした影響等についてはすでに概観した（概要は、『佛教



論叢』第五八号二一〇頁～二一八頁）。そこで、今回は、初めに高田敬輔原版の「選択集十六章之図」の絵相を註釈した『選擇集十六章圖說』や、絵相を挿絵に取り込んだ『通俗圖繪選擇本願念佛集』等の七点の資料を対照して各章段の特色をみることにし、次に『選択本願念佛集』^①を底本として、高田敬輔が教義のどの部分に着目し、どのような意図の下に絵画表現したかを考察する。本稿では、十六章段各章の絵相のうち第一章段を検討する。

二、対照する諸資料について

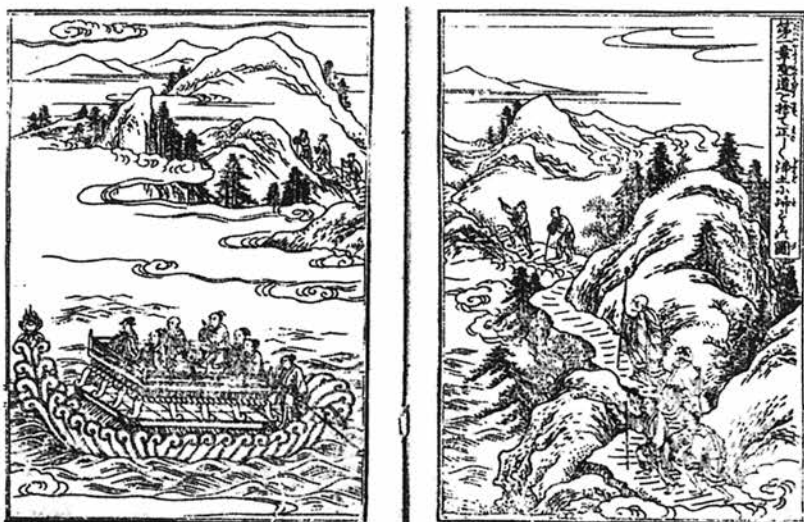
比較対照する資料として、次のものをあげることができる。

- ① 高田敬輔原版、木版「選擇集十六章之圖」正徳四年（一七一四）
《高田敬輔原版の木版で、本論文の基盤とするもの。》
 - ② 洛隠湖月『選擇集十六章圖說』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（二七四五）
《高田敬輔原版三十年後に、十六章各章の絵相を註釈した書。》
 - ③ 銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製 明治二十三年（一八九〇）
《明治期に高田敬輔原版をもとに銅版が開版され、左記④『選擇集十六章圖略解』と一具として刊行されたもの。》
 - ④ 堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）
《明治開版の銅版「選擇集十六章之圖」の各絵相を註釈。湖月の『選擇集十六章圖說』を基にしたものらしく、表現が類似している。》
 - ⑤ 慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念佛集』小倉山二尊院足曳堂藏 延享元年（一七四四）
《尾張名古屋、栄国寺第十一世慈門專阿が、師の庭空素碩から「仮名書き選択集」を託され、成就。挿絵は高田敬輔原版と類似している。^②》
 - ⑥ 關通『圖画和字選擇集』武江浅草引接室關通開版 同三縁山北谿忍海雲畫圖版藏 洛陽京極向西軒 延享元年（一七四四）
《捨世派の關通が和字の選択集を著し、画僧忍海に、挿絵を高田敬輔とは異なる和様に描かせている。》
 - ⑦ 『雲介子關通全集第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）
《關通の行業についての伝記。『圖画和字選擇集』の記載あり。》
- 以上の七点をその形態・内容から三つに大別すると、掛け幅状に絵画表現したもの《絵画表現①③》、選択集の本文を和字で表現し、各章の挿絵を高田敬輔の原版の絵相が取り入れているもの《絵画表現及び文書表現⑤⑥》、十六章各章の絵相について註釈をしているもの《文書表現②④⑦》それぞれを対照し、その特色を一覧表にする。

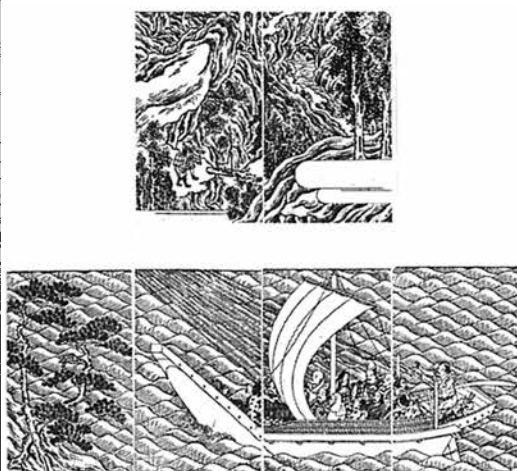
三、「選択集十六章之図」《第一章》の絵相の対照《①～⑦の資料による》

| | | |
|--|--|---|
| <p>①南田致輔刊版「選択集十六章之図」正徳四年（一七一四）</p> |  | <p>②湖月「選擇集十六章圖解」京都書房向松堂刊 延享二年（一七四三）正月廿五日</p> <p>第一 聖道淨土の二門を立て 聖道を捨て 淨土に帰する章</p> <p>おとし此段にハ、自力聖道門と他力淨土門とをならべ懸て、其自力のかたを捨て、他力の通にすめ入しめたまふとすべし。崎嶇なる山の形ハ、聖道の修行の成、成就したきを人のさかしき山にのぼるに喩たるなり。山峯のひとの先にすすむじりたるハ、上根上智の人ハ、自力にても稀にハ修行成就することもあるとをしらせたり。老たる足よハき人の登りかねたる懸は、下根下智の人の自力成就しがたきことをおしへたるなり。舟のミゆるハ、他力易行の御法を舟にたとへたり。乗たる在家出家ミな淨土をねがひ、本ぐはんを信じたる行、者のすがたを調したり。七人ともにこれ知来より筋ひきたるハ、撰取の御ひかりにむまりたる儀なり。これより末に至りても、総てこの筋ハ撰取の光、明のりやくをもちへたることをすべし。</p> |
| <p>③銅版「選擇集十六章之圖」知徳院南門前豐田製（左記「圖」と「圖略解」を一具として刊行）</p> |  | <p>④堀尾貞柄「選擇集十六章圖略解」京都豐田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月</p> <p>第一 聖道淨土の二門を立て 聖道を捨て 淨土に帰する章</p> <p>此章ハ、聖道門の難行と、淨土門の易行とを、ならべ懸て、其難行を捨て、易行をすめたまふとすべし。崎嶇なる山へ、人の登りゆくは、聖道修行のなしかたきに喩たるなり。高峯に人のすすみたるハ、上根上智の人なれば、稀には修行成就することもあるをしらせたり。老たる足よハき人の登りかねたる懸は、下根下智の人の成就しがたきことをしめしとるなり。松ハ淨土易行の法にたとへたり。乗たるは、出家在家ミな往生をねがひ、本願を信じ、念佛するすがたを調したり。十人ともに、阿弥陀佛より筋のひきたるハ、撰取不捨の光明なり。又此外に、筋のひきたるハ、撰取の光、明を、おしへたることを、知るべし。</p> |

⑤ 諸事阿『通俗圖繪撰本願念仏集』小倉山二尊院足庵監撰 延享元年（一七四四）



⑥ 關通『國語和字撰撰集』武江浅草引揚堂關通開版・同三録山北翁が雲畫圖 版権清澤京極内西軒 延享元年（一七四四）



の『雲子開通全集 第五巻 關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）』
 先づ第一章、聖道を捨て浄土に歸する其圖は、高山に人登るを以つて畫して、聖道の難行を顯はす。
 爾るに、上人の畫に、坂の中途に老人登る事不叶、下る人登人あり。是敬輔門公の畫に缺く處にし
 て、領納安からしめんとなり。他力の乗舟は日本の舟を書き給ふ。是此集は、和國壽蓮の謂なり。
 敬門二に異なり、尚乘船の諸人攝取の光明を拜するを畫し給ふ。是上人の感得にして、念佛衆生攝
 取不捨の利益を顯し給ふなり。敬門の二に缺く處なり。蓋毎に念佛者は、皆、光明攝取を顯し給ふ。
 愚なる文字も知ざる輩も、如来の光明攝取の利益を、思ひ付せんとの太唐なる方便にして、上人
 の老婆心、惡權して貪むべし。

四、①③⑦の資料による「銘文及び序文」や「各章段」にみる主な特色一覧表

(注：第一章～第十六章の絵画表現①③⑤⑥の特色は概略を記し、文書表現②④⑦は原文を抽出。)

| 章段 | 銘文及び序文 |
|---------------------|---|
| ①高田敬輔 「選擇集十六章之圖」 | ・目の物に接するや、最も感發しやすき物、また畫圖より善きは莫し。 ・予、昨歲、選擇一十有六章、畫圖形を容してこれを畫圖に入れ、都て一軸と爲す。 |
| ②洛陽湖月 「選擇集十六章圖說」 | ・夫耳目の物にふるること、鏡に影のうつるがごとし。 ・ある人、愚言の志のために十六段の者、たを圖西となす。 ・是即、千聞も一見にしかざるの義か、よつて此圖說を乞求むるに、洛陽湖月先師の筆跡をたづね、もとめて其意を見わけて、自行化他のため、これを書寫し、一巻となすこと志るなり。 |
| ③銅版 「選擇集十六章之圖」 | 序文及び銘文無し |
| ④堀尾貫務「選擇集十六章圖略解」 | ・選擇集十六章を、圖西となしたるを見て、其大意をしり、やすからしめんがために略して解釋をなしぬ。 |
| ⑤慈門專阿「通俗圖繪選擇本願念佛集」 | ・只し慍むらくは其の文、漢にして、和俗に通曉するに過ぎなし。國字を以てて翻し、これを將來に垂るは、是れ我が夙志なり。 ・ここに於いて相い校讎を与え、また從いて圖面の意欲に會せし賢る者をして解し、易からしむるなり。 |
| ⑥關通 「國西和字選擇集」 | ・しかあれど、真名書すさみ、尼女、無智の輩、さとしかたからむことをおもひ、引接室の關通上人、ここに假名にやはらけ、三緣山の忍海上人、そのころを繪にかきて世にあまねくひろめんと、津梁ならむかし。 |
| ⑦曇子關通全集 第五卷 | ・其頃上人の講談は、選擇集なりしと上人深く此集をして、廣く道俗の人に拝見せしめんと年頃日頃願はず。雨しなから、漢字にして讀に勞せざるにあらす。是に依つて、上人此集全編國字を以て、梓に鑄して世に流通し、元祖の隨自意をして、四輩にさとしめん。 ・爾るに、上人思惟し給ふには、國字を以てて讀まん人は、是を知るといへども、尚讀めざる人々も此法を悟らさしめんため、畫圖を以てて是を指南せんと、種々徳甲午年、此集の圖正有り。是や江州蒲生日野敬輔の畫にして、爾も華頂の義山上人へ尊賢に備へ御隨喜ありしとぞ。委敷は彼十六章圖に諱して、世に残せり。此畫を依據として上人亦圖を顯し給ふ。爾るに三緣山北谷忍海上人も上人の專修弘法を隨喜有つて、同志ましめて、十六章の畫を成し給ふ。 |

| 第一章 | 第二章 | 第三章 | 第四章 |
|---|---|--|--|
| ・嶮岨なる山にのぼる人八人。 ・他力易行の御法の舟（唐船）に乗る人、大人六人、小人二人の計八人。 | ・上段、阿弥陀如来の佛前で五種正行の様子。五人の出家。 ・下段、阿弥陀如来、地藏菩薩、四天王の一行を導く様子。五人の出家。 | ・阿弥陀如来が法蔵菩薩の時、世自在王佛の前で二百一十億の諸佛の浄土を親念の佛の一行を導く様子。 ・法蔵菩薩は坐位。 | ・上輩、出家。 ・中輩、在家。 ・下輩、俗人の臥す姿。 |
| ・嶮岨なる山の形ハ、聖道の修行の成し、がたきを人のさかしき山にのぼるに喩たるなり。 ・七人ともミだ如来より筋ひきたるハ、 〔注〕七人とは大人六人と小人二人で大人一人とみたか。 | ・下の段則五種の出家の姿五人あり。 ・上の段に佛像あり。すなハチミだにのすがた五人あり。 | ・あみだ如来因位法蔵はさつと申ししとて、世自在王佛の御ものも二百一十億の浄土をミたまひて、もう一の浄土の因行難行にして凡夫のうへに調がたきゆへに、念佛の一行をもつて衆人往生の行とさだめたまふことをあらはせり。 | ・僧形の座したるハ、則上輩の人なり。 ・中輩の繪の中に在家の宮殿の中在家のすがたあり。すなハチ中輩の人なり。 ・俗人の臥したるハ、下輩の人なり。 |
| ・嶮岨なる山へ、人の登りゆくは、聖道の修行のなしがたきに喩たるなり。 ・十人とも、阿弥陀仏より筋ひきたるハ、撰取不捨の光明なり。 | ・上の段の佛像ハ、阿弥陀佛なり。又出家のすがた五人あり。 ・中尊ハ阿弥陀如来、右ハ地藏菩薩、左ハ四天王の中一人とみたり。外の一佛ハ則餘佛なり。 ・正行にハ十三の得あり。難行にハ十三の失あるなり。 | ・阿弥陀如来が法蔵菩薩の時、世自在王佛の前で二百一十億の諸佛の浄土を親念の佛の一行を導く様子。 ・法蔵菩薩は坐位。 | ・僧の坐したるハ、上輩の人なり。 ・宮殿の中に在家のすがたあり。則中輩の人なり。 ・俗人の臥したるハ、下輩の人なり。 |
| ・嶮岨なる山にのぼる人九人。 ・御法の船（唐船）に乗る人六人、小人二人、船頭一人の計九人。 | ・右中段、阿弥陀如来の佛前で五種正行の様子。五人の出家。 ・左下段、阿弥陀如来、地藏菩薩、四天王の一行を導く様子。五人の出家。 | ・阿弥陀如来が法蔵菩薩の時、世自在王佛の前で二百一十億の諸佛の浄土を親念の佛の一行を導く様子。 ・法蔵菩薩は坐位。 | ・上輩、出家。 ・中輩、在家。 ・下輩、俗人の臥す姿。 |
| ・嶮岨なる山にのぼる人七人。 ・御法の船（和船）に乗る人十二人、小人一人、船頭二人の計十五人。 ・一本の丸木橋。 | ・一人の出家、称名正行。屋内に臥す女。座す男子。屋外に大人四人、小人一人。卓上に三佛の世天諸菩薩像。八体の諸経巻。 | ・阿弥陀如来が法蔵菩薩の時、世自在王佛の前で二百一十億の諸佛の浄土を親念の佛の一行を導く様子。 ・法蔵菩薩は立位。 | ・上輩、出家。 ・中輩、在家。 ・下輩、俗人の臥す姿。 |
| ・坂の中邊に老人登る事不叶、下る人亦あり。是敬輔門公の畫に缺く處にして、頭納安からしめんとたり。 ・他力の乗船は日本の舟を書き給ふ。是此集は、和國著述の謂なり。敬門二に異なり。尚乗船の諸人を撰取の光明を拝するを畫し給ふ。 | ・敬門の二つは、五種の動行の消息を畫すといへども、今上人は、難行たる世天諸菩薩の行法を拾てたるを題して庭に置く。 ・正行に歸して勤に居住座臥の消息を畫して、稱名易修にして、爾も光明の利益あり。勝易の二義をぞ畫し給ふ。 | ・世自在王の御所に、法蔵菩薩二百一十億の浄土を選擇し、安樂淨刹建立の願意、衆生稱名を業として西方にいらしむ誓願を起し給ふ。消息を畫し給ふ。 | ・上品來迎、中品實塔あり。來迎下品は、夢の如く來迎を拝する事を明し給ふ。 |

—
—
—
—
—

[illegible]

| 第十五章 | 第十六章 |
|--|---|
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・釈迦如来、弥陀の名号を舍利弗に附屬する姿を顯す。 ・諸菩薩、聞衆、人民、十七人。 ・舍利弗、座具あり。 |
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・釈迦如来、阿彌陀を説おはりたまふに、舍利弗および一切世間の天人阿修羅等佛の御説法を聴聞し、ぎりなし。よいて末のよの衆生のためにねんぶつをもつて舍利弗にさづけたまふ。佛の御姿ハ、すなハち釈迦如来、弥陀經を説たまふ。解なり。 |
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・釈迦如来、阿彌陀を説おはりたまふに、舍利弗および一切世間の天人阿修羅等佛の御説法を聴聞し、ぎりなし。よいて末のよの衆生のためにねんぶつをもつて舍利弗にさづけたまふ。佛の御姿ハ、釈迦如来、弥陀經を説たまふ。解なり。 |
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・釈迦如来、阿彌陀を説おはりたまふに、舍利弗および一切世間の天人阿修羅等佛の御説法を聴聞し、ぎりなし。よいて末のよの衆生のためにねんぶつをもつて舍利弗にさづけたまふ。佛の御姿ハ、釈迦如来、弥陀經を説たまふ。解なり。 |
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・釈迦如来、阿彌陀を説おはりたまふに、舍利弗および一切世間の天人阿修羅等佛の御説法を聴聞し、ぎりなし。よいて末のよの衆生のためにねんぶつをもつて舍利弗にさづけたまふ。佛の御姿ハ、釈迦如来、弥陀經を説たまふ。解なり。 |
| ・六方の諸仏、念佛の行者を護念する姿を顯す。 ・行者、男子一人、女人一人。 | ・舍利弗へ念佛付屬し給ふ。章、畫圖のこ |

五、対照一覧表から

右の対照一覧表から、七本の資料のいずれも、製作の発端の意図が、高田敬輔の「選択集十六章之図」の製作過程を著す掛幅下段の銘文「目の物に接するや最も感發しやすき物また畫圖より善きは莫し。」にあるように、難解な漢文で著された『選擇本願念仏集』を一般衆生に理解させるには絵画表現したものが第一であるということが記されている。そして、その記述部分は、漢文よりも和字の方が、より理解しやすいということが述べられている。

そのような背景のもとに生まれたのが、

* 掛幅と註釈書

- ・ 木版「選擇集十六章之図」と『選擇集十六章圖説』
- ・ 銅版「選擇集十六章之図」と『選擇集十六章圖略解』

*挿絵入りの和字による刊本

・『通俗圖繪選擇本願念佛集』

・『圖画和字選擇集』、その製作背景の著書『雲介子關通全集』

のようにまとめることができ、絵画表現の掛幅と和字表現の註釈書が一具として刊行されていること。そして、絵画表現と和字表現が一体となった刊本として『挿絵入り和字選択本願念仏集』の体裁のものが流通することになったことが分かる。

次に、注目すべきは、

・木版「選擇集十六章之図」と『選擇集十六章圖説』

・銅版「選擇集十六章之図」と『選擇集十六章圖略解』

・『通俗圖繪選擇本願念佛集』

の五本の資料は、十六章各章の部分構成や人員配置等の絵相に若干の相違点がみられるが、基本的には高田敬輔原版の絵相や構成をほぼ踏襲したものであることを知ることができる。

しかし、絵入り和字による刊本の『通俗圖繪選擇本願念佛集』と『圖画和字選擇集』については、両著とも延享元年（一七四四）と同じ年の刊行であり、本文の和字部分もほぼ同様の形態と内容であるが、挿絵部分は明らかに絵相が異なるのである。同じ和字による『選擇本願念佛集』でありながら、一方では高田敬輔の絵相や構成を踏襲し、もう一方の『圖画和字選擇集』では全く異なった和様の絵相や構成が展開されており、疑問であった。

その疑問については、『雲介子關通全集』第五卷（二〇九～二一〇頁）によれば、

他力の乗舟は日本の舟を書き給ふ。是此集は、和國著述の謂なり。敬門^{マツ}二に異なり、尚乗船の諸人攝取の光明を拝するを畫し給ふ。是上人の感得にして、念佛衆生攝取不捨の利益を顯し給ふなり。敬門^{マツ}の二に缺く處なり。（以下略）

と敬門二（高田敬輔）と異なった和様の絵相で、関通が感得した構想で画僧忍海に描かせた、という明確な製作意図を知ることができ、認識を新たにすることができた。

また、洛隠湖月の『選擇集十六章圖説』の翻刻を通して言えることは、高田敬輔原版から三十年後に、その注釈書として刊行されている事実と、そして、百四十五年後の明治二十三年に刊行された堀尾貫務の『選擇集十六章圖略解』が、その内容や体裁がほぼ同様であることから、洛隠湖月の『選擇集十六章圖説』をほぼ踏襲したものであるということを知ることができる。

六、原典『選択本願念仏集』（義山校訂本）第一章の論理展開

『選択本願念仏集』各章ごとの教義について、その論理展開の重要項目の、どこに高田敬輔が注目して絵相を制作したかをみると、

（一）標章《篇目》

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正歸淨土之文

（二）道綽『安樂集』卷上 第五《引文》

＊一切衆生皆有佛性遠劫以來應值多佛

＊何因至今仍自輪廻生死不出火宅

（三）出離の要道、二門

＊一謂聖道

＊二謂往生淨土

（四）聖道門、不相応

＊其聖道一種今時難證

・一由去大聖遙遠

・二由理深解微

（五）今時末法、通入路は淨土門

『大集月藏經』

・當今末法現是五濁惡世唯有淨土一門可通入路

（六）大經に説く弥陀の救済

＊大經云若有衆生縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺

・大乘…眞如實相第一義空曾未惜心、小乘…未有其分（中略）是以諸佛大慈勸歸淨土。

（七）諸宗の教相判釈《私釈》

・有相宗・無相宗・華嚴宗・法華宗・真言宗、五宗の教相判釈を例示。

（八）浄土宗の教相判釈

* 今此浄土宗者若依道綽禪師意立二門而攝一切所謂聖道門浄土門是也

① 浄土宗の宗名

・ 華嚴宗元曉『遊心安樂道』、唯識宗慈恩『西方要決』、三論宗迦才『浄土論』に浄土宗あり。

② 聖道門、浄土門の二門論

・ 但諸宗立教非今正意且就浄土宗略明二門者一者聖道門二者浄土門

（ア）聖道門とは

・ 大乘…眞言佛心天台華嚴三論法相地論攝論此等八家之意

・ 小乘…聲聞緣覺斷惡證理入聖得果之道也

四乘者三乘之外加佛乘也

（イ）浄土門とは

《謂三經一論是也》

* 正明往生浄土之教…三經者一無量壽經二觀無量壽經三阿彌陀經也

一論者天親往生論是也

* 傍明往生浄土之教…華嚴・法華・隨求・尊勝等明諸往生浄土之行之諸經是也

又起信論・寶性論・十住毘婆沙論・攝大乘論等明諸往生浄土之行之緒論是也

（九）浄土門への帰入のすすめ

① 道綽『安樂集』の二門論

・ 凡此集中立聖道浄土二門意者爲令捨聖道入浄土門也

・ 就此有二由一由去大聖遙遠二由理深解微

・ 此宗之中立二門者非獨道綽曇鸞天台迦才慈恩等諸師皆有此意

② 曇鸞『往生論註』にみる龍樹『十住毘婆沙論』の二道論

* 謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云菩薩求阿毗跋致有二種道一者難行道二者易行道

【高田敬輔着目点】（太字筆者）

◎難行道者謂於五濁之世於無佛時求阿毗跋致爲難

・難行道：譬如陸路步行則苦

◎易行道者謂但以信佛因緣願生淨土乘佛願力使得往生彼清淨土

・易行道：譬如水路乘船則樂

難行道者則是聖道門也 易行道者則是淨土門也

難行易行・聖道淨土・其言雖異・其意是同天台迦才同之應知

③慈恩『西方要決』の三乘（聖道門）・淨土（淨土門）二門論

*慈恩『西方要決』

・仰惟釋迦啓運弘益有緣教闡隨方竝霑法潤親逢聖化道悟三乘福薄因疎勸歸淨土

*さらに『西方要決』の後序

・夫以生居像季去聖斯遙道預三乘無方契悟 ・三乘者即是聖道門意也 ・淨土者即是淨土門意也

・三乘淨土聖道淨土其名雖異其意亦同淨土宗學者先須知此旨

*賢哲の例

・設雖先學聖道門人若於淨土門有其志者須棄聖道歸於淨土・例如彼曇鸞法師捨四論講說一向歸淨土・道綽禪師閣涅槃廣業偏弘西方行

（十）淨土宗師資相承の血脈

*聖道家諸宗各有師資相承：天台宗、眞言宗、自餘の諸宗、又各有相承血脈

◎淨土宗亦有血脈：道綽善導流から両説。

・『唐宋両伝』の五祖、菩提流支三藏、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感法師、少康法師。

以上の論理展開で、高田敬輔は、特に曇鸞引用の龍樹『十住毘婆沙論』の二道論に着目し、それを象徴する標章を「第一捨聖道歸淨土章」とし、険阻な山道を喘ぎ登る様子を聖道門・難行道として描くとともに、もう一方では苦海のを渡る「寶船」に乗って合掌する衆生の様子を描いて淨土門・易行道としている。そして、この「寶船」の根拠が、義山の『當麻曼陀羅述獎記』卷三（元禄十六年へ一七〇三）「三 池中寶船」の絵相との類似点が多いこと（本稿三十四頁【参考資料】参照のこと。）から、その記述部分を記すと、『當麻曼陀羅述獎記』卷三 二十七丁一行目、

左右寶船俱以華葉爲船舳艫有霑珠右船向左船中有飛雲（中略）

左船向右船中有一華樓一飛雲右華樓低而大柱脚屈曲如雲左飛雲高而小下張流蘇（中略）

有流泉浴池有七寶船衆生遊戲他界既有之樂邦何無乎故般舟讚云霑樹飛華汎德水童子捉取已爲船又如綽禪師親見西方寶船（以下略）とあるように、左右の「寶船」は、華葉で出来、舳と艫に「霑珠」がある。船中の「華樓」は低くして大きく「柱脚」は屈曲して雲の如く、「飛雲」は高くして小さく下に「流蘇」を張っていること。そして、それは「流泉浴池」に有る「七寶船」で衆生が遊戲していること。『般舟讚』には、霑樹から飛んだ華が徳水に汎れ、童子がそれを捉えて船にしているということ。又、道綽禪師も親しく西方の寶船を見たということも記されている。そして、その乗船の八名には、第七章に描く阿弥陀仏から、摂取不捨の光明が降り注ぐ絵相として描かれている。

七、考察

この第一章の絵相について注目すべきは、『選択本願念仏集』に龍樹の『十住毘婆沙論』を引いて述べた最後の一行の文言である。

難行易行・聖道淨土・其言雖異・其意是同天台迦才同之應知（太字筆者）

と「天台、迦才」の意は同じであるとしながら、引文は記載されていない。そこでこの部分について、石井教道の『選擇集全講』⁽³⁾には、

かく曇鸞の上に同一分類批判があるばかりではなく、天台智者大師は十疑論の中に正しく曇鸞の二道判そのまゝを援引して淨土への歸命を勧められ、迦才もまた淨土論の中に（中略）二道を援引されているなどに依れば、何れも同一立場であったことが判明（以下略）

また、小澤勇貫も『選擇集講述』⁽⁴⁾で、

以上が論註に説かれる難行易行の二道説である。（中略）論註のこの説は天台の『十疑論』・迦才の『淨土論』にも引用されてあつて、同一の考えであることが知られる。

と石井、小澤両氏も天台『淨土十疑論』と迦才『淨土論』は同じ考えであることを述べている。

ここで改めて、最も基本となる龍樹の『十住毘婆沙論』にはどのように記されているか、そして、それを曇鸞の『往生論註』⁽⁵⁾上、次に天台智顗の『淨土十疑論』、さらに迦才『淨土論』にどのように引用されているか、四師の論述を対比すると、（以下、傍線・読み下し、筆者）

*龍樹『十住毘婆沙論』巻第五 易行品第九

佛法有無量門如世間道有難有易陸道步行則苦水道乘船則樂菩薩道亦如是或有勤行精進或有以信方便易行疾至阿惟越致者⁽⁵⁾

（陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。）

*曇鸞『往生論註』上の引用部分は、

謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云（中略）譬如陸路歩行則苦易行道者謂但以信佛因縁願生淨土乘佛願力使得往生彼清淨土佛力住持即入大乘正定之聚正定即是阿毗跋致譬如水路乗船則樂^⑥

（譬えば陸路の歩行は則ち苦しきが如し、〈中略〉譬えば水路の乗船は則ち樂しきが如し。）

*天台智顗『淨土十疑論』引用部分は、

是故十住婆沙論云於此世界修道有二種一者難行道二者易行道難行者在於五濁惡世於無量佛時求阿毗跋致甚難可得此難無數塵沙說不可盡略陳有五（中略）譬如跛人歩行一日不過數里極大辛苦謂自力也易行道者謂信佛語教念佛三昧願生淨土乘彌陀佛願力攝時決定往生不疑也如人水路行籍船力故須臾即至千里謂他力也^⑦

（譬えば跛人の歩行は一日數里に過ぎず極めて大辛苦の如し、〈中略〉人が水路を行く船力を籍る故に須臾にして即ち千里に至る如し。）

*迦才『淨土論』引用部分は、

故智度論云行者求阿毗跋致有二種道一者難行道二者易行道如水陸兩路此方修道則難猶如陸路生淨土修道則易猶如水路也^⑧

（水陸兩路の如し。此方の道を修すは則ち難し猶を陸路の如し、淨土に生ず道を修すは則ち易く猶を水路の如くなり。）

の引用がみられるが、特に注目すべきは、曇鸞、天台智顗は龍樹の『十住毘婆沙論』の引用であるが、迦才は同じ龍樹の『大智度論』である。これについて、桑門秀我は『選擇集大意』^⑨で、

若し自ら定慧の分無しと知らは須らく淨土の行を修して淨土の中に於て無上菩提を求むべし、故に智度論に不退を求むるに難易二道を明かし水陸兩路に譬へたり。（智度論恐くは十住論なるべし俱に龍樹の所造なるを以て誤るのみ）

と『智度論』とあるのは恐らく『十住毘婆沙論』で、ともに龍樹の所造なので間違ひであろうとしているが、『大智度論』を詳細に検討すると、左に掲げるように、

菩薩未得無生法忍深著世間法諸煩惱厚雖有福德善心軟薄不進故爲煩惱所遮得無生忍法無復是事未得無生忍法用力艱難譬如陸行得無生法忍已用力甚易譬如乗船是故無生法忍諸菩薩所貴以是貴故須菩提問世尊得無生法故受記佛言不也^⑩

となつており、明らかに『大智度論』を典拠としてゐることを知ることができる。

ここでは、龍樹の『十住毘婆沙論』から曇鸞、天台智顗が、そして『大智度論』から迦才と、具体的な譬喩の内容が三師三様に用いられ、同一の難行道陸路、易行道水路の二道論を述べているものの、表現に異なりがみられることを知ることができる。このようなことや、曇鸞の『往生論

註』に引く『十住毘婆沙論』、天台『浄土十疑論』、迦才『浄土論』に説かれる譬喩の内容についても、義山から講説を受けていたことが想定される。そこでさらに、義山自身がどのような難易二道の捉え方をしていたか把握する必要がある。

義山の難易二道の捉え方については、法然の法語について注釈した書『和語燈録日講私記』（享保三年（一七一九）義山述 見阿素中誌）からみることができる。その該当箇所の法然の『黒谷上人語燈録』巻第一 十七丁の『往生要鈔』の難易二道についての記載部分は、

又聖道浄土ヲハ難行道易行道ト名付タリ。喩ヲ取テ是ヲ云ニハ、難行道トハ、サカシキ道ヲカチヨリユカンカ如シ。易行道トハ海路ヲ船ヨリ往カ如シト云ヘリ。然ニ目シ井足ナヘタラン者ハ陸路ニハ向フヘカラス、只船ニ乗リテノミ向ノ岸ニツクヘキ也。

とあり、そして、この法然の論述を解説した義山の記述は、

難行道とは十住毘婆沙論云謂く五濁之世於無佛時求阿毘跋致爲難此難乃有多途乃至五者唯是自力無他力持譬如陸路歩行則苦と云へり或は木曾海道（海路）などの嶮しき道を馬駕籠にも不乗岩につたひなとして行くは苦しきと也

易行道とは同論云謂く但以信佛因縁願生浄土乗佛願力使得往生彼清浄土佛力加持即入大乘正定之聚譬如水路乗船則樂と云へり或は大坂へ下るに天氣の好き日伏見より船に乗るか如し陸路十三里行くとは大なる違ひ也²²

と記され、義山の難行易行二道の比喩的内容や思考過程を知ることができ、このことも少なくとも高田敬輔の絵相に反映されたものと思われる。

八、まとめ

高田敬輔は、曇鸞引用の龍樹の二道論をふまえ、難行道は聖道門、易行道は浄土門、それを象徴する標章を「第一捨聖道歸浄土章」とし、浄土宗の教相判釈をあらわす絵相とした。

その絵相の背景には、難行・易行二道の譬えを、龍樹、曇鸞、天台智顗、迦才、法然上人、義山の六師それぞれが、龍樹の原典『十住毘婆沙論』『大智度論』をもとに、二門・二道論の具体的な譬喩として引用されている。

加えて、高田敬輔と特に関わりの深い義山の譬喩が、「木曾街道」「馬駕籠に乗らず」「岩につたい」「天氣の良い日」「大坂へ」「伏見より」「陸路十三里」等と京都周辺のみより身近な具体的事例を挙げ、迷える凡夫に二門・二道の教えを説こうとする意図を知ることができる。そこからも義山の意向を踏まえた上での第一章の絵相であるということができるのである。

さらに、高田敬輔が第一章で描いている「水路の乗船」は、「唐船」様の「寶船」を呈しているが、この「寶船」の根拠が、義山の『當麻曼陀羅述變記』巻三の絵相と類似しているのである。

以上のことから、高田敬輔の「選択集十六章之図」の第一章の絵相は、文献的には、義山の『和語燈録日講私記』にみる譬喩表現に則し、絵画表現的には『當麻曼陀羅述獎記』の「流泉浴池の七寶船」の絵相の影響を強く受け、「易行道」の「水路の乗船」を象徴的に描いたものと思われる。

〔注〕

- (1) 良照義山『新彫選擇本願念佛集』元禄九年義山開版本 嘉永二年再刻 芝峯 昇安室藏版 西山堂總兵衛
- (2) 鷲津清静『通俗圖繪選擇本願念佛集について』『西山学会年報』第一四号四四五頁。西山学会 平成一六年
- (3) 石井教道『選擇集全講』七二頁。平樂寺書店 昭和五五年
- (4) 小澤勇貫『選擇集講述』二七頁。浄土宗 昭和四六年
- (5) 大正新脩大藏經第二六卷(No.一五二一) 四一頁b。
- (6) 浄土宗全書第一卷二一九頁。
- (7) 浄土宗全書第六卷五七三頁。
- (8) 浄土宗全書第六卷六六四頁。
- (9) 桑門秀我『選擇集大意・出雲宗要』三六〇三七頁。国書刊行会 昭和五九年
- (10) 大正新脩大藏經第二五卷(No.一五〇九) 六〇二頁a。
- (11) 了慧篇『黒谷上人語燈録』華頂山藏版 澤田吉左衛門 寛永二〇年刊。
- (12) 浄土全書第九卷七一六〇七一七頁。

〔参考文献〕

- ・良照義山『新彫選擇本願念佛集』元禄九年義山開版本 嘉永二年再刻 芝峯 昇安室藏版 西山堂總兵衛
- ・石井教道『選擇集全講』平樂寺書店 昭和五五年
- ・小澤勇貫『選擇集講述』浄土宗 昭和四六年
- ・良照義山『當麻陀羅述獎記』元禄一六年 今井重左衛門梓

(はやし たけと 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導教員…松永 知海 教授)

二〇一四年九月二十六日受理

【参考資料】

●良昭義山『當麻曼陀羅述撰記卷三』二十六丁「池中寶船」の絵相と
高田敬輔「選擇集十六章之図」第一章「水路の乗船」の絵相の対比。

良昭義山『當麻曼陀羅述撰記卷三』二十六丁「池中寶船」の絵相



●絵相の類似点

- ① 船の寶珠
- ② 草樓の柱脚
- ③ 草樓の欄干
- ④ 流蘇（五色の羽で帷幄を飾る彩り）
- ⑤ 船体（五色の屈曲した雲状の側面）

高田敬輔「選擇集十六章之図」第一章の「水路の乗船」の絵相

